カンバラさん

ミャンマーのイラワジデルタで、マングローブ植林事業にかかわってきました。拠点にしているオッポクウィンチャン村の河畔に、一本の大きな木があります。マングローブの一種、ハマザクロの仲間で、現地名ではカンバラと言います。樹齢は誰も知りません。何百年も生きてきた孤高の古木です。

その木、カンバラさんには「ヨカゾウ」と呼ぶ精霊が棲んでいて、ジブリ作品「もののけ姫」に出てくるコダマのような小人たちが樹上にいるそうです。見える人には見えますが、霊感のない私がいくら目を凝らしても、見えたためしはありません。でも、「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」です。この木の周りには、いつも神聖な気が流れているように感じます。

私たちは、このカンバラさんに祠を建て、現場入りした時は必ず、旅の安全無事と仕事の成就を祈ってお参りに出かけます。満潮時を見計らってボートを岸に付け、上陸したらすぐに迎えてくれるカンバラさん。仲間のチョーチョー君たちが村で調達してくれた万年竹の葉っぱと野の草花をお供えし、太くて長い線香をくゆらせます。大概、安い白檀（サンダルウッド）を用いますが、時には高価な沈香（アガーウッド）を使うこともあったかも。

２００８年５月、この地をミャンマー史上最大級のサイクロン・ナルギスが襲いました。カンバラさんも暴風で主幹を折られ、多くの葉を落とし、まさに枯れる寸前だったそうです。しかし、「ヨカゾウ」が守ってくれたのか、お陰様で息を吹き返しました。そして今でも、季節になると、クリーム色のぽこぽこした可憐な花を咲かせています。

「木を愛すれば木もまた私を愛してくれます」。これはチョーチョー君の至言。

木を守ることは功徳なのだと、一緒に働く仲間たちは教えてくれるのです。日々の暮らしの中で、足るを知り、神仏に崇敬篤い人たち。彼らにはどこかなつかしい香気があります。

神さびたカンバラさんの前で、私たちは清々しい香りに包まれ、集合写真を撮りました。対岸では村の子どもたちが歓声を上げて、幸せそうに笑っています。

（鶴田幸一）

朝の光を背にしたカンバラさん

カメラを向けたら急に神妙な村の子どもたち